

弘法大師の書

一

弘法大師は僧中の高僧、且つ眞言宗——あまろ晃の屬する宗旨——の開祖で、日本人に平假名といふ書體、伊呂波といふ表音字母を書くことを教へた最初の人であつた。して、彼自身書家中の最も驚異すべき能書家であつた。

それで、弘法大師一代記といふ書に、かういふ話が載つてゐる。彼が支那に居つた時のこと、宮殿の或る室の名を書いてある文字が、古くなつて磨滅したので、帝は彼を召して新たに室の名を書かせた。そこで、弘法大師は右手に一本、左手にも一本の筆を取り、左足の指間に一本を挟み、また右足の指間にも一本を挟み、更に一本を口に啣へて、五本の筆をかやうに持ち乍ら、壁上に文字を書いた。して、その文字は流れに浮ぶ漣の如く滑かで、支那に於て空前の美しいものであつた。それから、また一本の筆を取つて、遠方から壁の上へ墨滴を跳ね飛ばした。すると、墨滴は落ちるに従つて、忽然變じて美麗なる文字となつた。かくて、帝は大師に五筆和尚の名を賜はつた。

また或る時、大師が京都に近き高雄山に住んでゐた際、天皇は金剛上寺といふ大寺院の額を書

かせようと思召し、使者に額を持たせて、大師の許へ遣はされた。しかし、使者が大師の住所へ近づいた時、前面の河は、雨に漲つて渡られなかつた。が、その内に大師が對岸に現れ、使者から聖旨を承はつたので、彼は使者に額をさし上げさせた。して、彼は對岸に立ち乍ら、筆を揮つて文字を空中へ書いた。すると、同時にその文字が、使者の支へてゐる額の上に現れた。

二

その頃、弘法大師は獨り河畔で冥想をするのが常であつた。ある日、かやうに冥想の際、ふと氣がついて見れば、彼の前に一人の童子が立つて、物珍らしげに大師を凝視してゐた。童子の衣服は貧乏人の着るものであつたが、顔は立派であつた。大師が怪んでゐると、童子が『貴僧は同時に五本の筆もて、字を書く五筆和尚なるか』と尋ねた。『我はその者なり』と大師が答へた。すると、童子は『貴僧もし、その人ならんには、願くは天に字を書き玉はんことを』と云つた。そこで、大師は立上つて、筆を取り、天に向つて字を書くやうな舉動をした。して、間もなく天空に極めて美しく、文字が現れた。それから、童子は『この度は我試みむ』と云つて、大師がしたやうに、天へ書いた。また童子は『願くは我がため、河の水面に書き玉はんことを』と云つた。大師は水をほめた、へた歌を水面に書いた。暫らくは文字が、木の葉の降つたやうに、水面に美しく留まつてゐるが、やがて流れと共に動いて、浮び去つた。『この度は、我試みむ』と童子が云つて、草書で龍

といふ字を書いた。その字は流水の面に留まつて動かなかつた。が、大師は字傍にあるべき一つの小さな點が無いのを見て、『何故、點を打たざりしぞ』と尋ねた。『げに忘れて侍べり。我がため點を打ち玉へかし』と答へた。そこで大師が點を打つと、不思議！ 龍の字が一匹の龍となつて、水中で激動し、虚空は雷雲に暗く、電光燃え上がり、渦巻く嵐の中に龍は昇天して了つた。

で、大師は『そなたは誰ぞ』と小童に聞いた。小童は『我は吳臺山に祀らるる智慧の主、文殊菩薩なるぞ』と答へた。斯く語つてゐる内に、小童は變形して、神佛の美にかゝやき、四肢から柔和な光を放つて、微笑み乍ら空へ登つて、雲の外へ消えた。

三

しかし、弘法大師自らも嘗て御所の應天門と題した扁額に、應字の傍へ點を打つのを忘れた。天皇がその譯をお尋ねになつたとき、大師は『忘れて侍べり。されど今、點をば加へ参らせん』と答へた。最早額は掛けられて、高く門の上にあつたから、天皇は、梯子を運んで來させ玉うた。が、大師は門前の敷石の上に立つたまま、單に筆を額に向つて投げつけた。すると、立派にそこへ點が出來て、筆は手へ戻つてきた。

弘法大師はまた御所の光華門の扁額を書いた。その門の近くに紀ノ百枝といふ男が住んでゐたが、弘法の書いた文法を罵倒し、その内の一字を指して、『虚勢を張る力士に似たることよ』と云

つた。が、その夜、百枝の夢に力士が現れ、臥床の側へきて、彼にとびかかり、拳骨でなぐりつけた。毆打の痛さに泣き出すと、彼の目は醒めた。見れば、力士は空に上つて、彼が罵倒した文字に變形し、門の上の扁額へ返つて行つた。

また小野道風といふ、非常に巧妙で、名高い書家があつた。彼は弘法大師の書いた秋鶴門の額字を嘲笑つて、秋の字を指して、『秋の字さながら米の字とも見ゆ』と云つた。すると、その夜、彼の嘲笑つた文字が人となつて現れ、彼に襲ひかかつて、彼を打ち、幾たびも顔の上へ、跳び上つたり下りたりして——丁度米搗が米をつく杵を動かすために、はね上つたり下りたりする如く——その間『いかに、我は弘法大師の使者なるぞ』と云ひつづけた。彼が目を醒まして見ると、ひどく蹂躪されたやうに、傷ついて出血してゐた。

弘法大師の歿後、餘程の歳月がたつてから、大師の揮毫した美福門と光華門の額字が、殆ど磨消してゐることがわかつた。天皇は大納言行成に扁額の修繕を命ぜられた。が、行成は他の人々の身の上につつたことに鑑みて、勅命を實行するのを憚つた。して、弘法大師の御怒りを恐れて、供物を捧げ、許可の現示を祈つた。その夜、夢中に大師が現れ、やさしく微笑して『帝の望みたまふままに取行ふべし。恐るることかは』と云つた。そこで、彼は寛弘四年正月、額を修復した。このことは本朝文集に録してある。

すべて是等の事實は、私の友人晃が私に話して呉れたものである。

(落合貞三郎譯)

The Writing of Kōbōdaishi. (Glimpses of Unfamiliar Japan.)